法華経文句要
六
雑
10
六
ロ 9
3585
6

門口
號 3585
卷 6

門 儀
號 355
卷 6

義母宛ニ下同様

一 娘まの妻ゟ之ゟ乃事 付り或回

一 同 兄弟姉妹ゟ乃事

一 ゟ之ゟ乃事

一 同 娘ゟ祖父ゟ付り其手ゟ付り家督ゟ乃事

明治三十六年十一月五日
坪内祐蔵氏寄贈

東京市麻布区飯倉町一丁目壱番地 坪内雄蔵

小説

慈母茄言下

一そこのせうとゝ其妻ハそのさて百人にまさるろんのうつゝさうこさすのゝあり て娶きり女房の都にむまれてやんごとなきひろもさまにあらぬ父ごみがくんにうとく母ごみ女容をもうけらるおろふまくてゝうゝみかゝやゝこたかうえりいるゝれば武きみをも忘乃むすめともむまれてひとりうゝたやうもてをおの乃ゝ秘性のりく出さる陳くいゝ爲れしゝや彼おやゝ其ゝ白ゝくうげにせうとのいと祝ゝ乃ゝ中におりひ乃ゝ乃ゝよいと良ゝくゝゝいうてゝいうゝんゝうゝうゝさうゝうゝをんとゝたゝるゝ次のゝうんゝゝゝゝゝふゝもゝゝゝゝすゝゝゝ無云女事ゝ女工ゝいゝとゝゝゝゝゝゝゝうゝくゝゝをゝゝとゝにゝあゝうゝ妙人ゝゝくゝゝゝ二ゝゝ

たいゑのこと給ふすなはちとぞさればはゝみし母君の
手をつくて女子女工いとうしこてらまる一からり
りしちゝくろくとし〳〵給つゝどもおのが本性にかへ
むてまくすもんれやとにみんなうひ隙すくしてい
よくかくされどとし〳〵なつてまれてみんなつひ給つゝ
じふぐおそてんなくへやしろてしとせし上の
るにまうりて屋んごるみき消息(せうそこ)のどうりうしにお
らひ性二(さが)とせげりのうちにやしれをさうつて
しれをゆるびそうりをりじや母君お給つまーしく
つもん忠にまうひ実端(じえん)に落入(らくにう)しくなりしゞごの
こゝみも何のいやかいくれ給つぞ母にゝうひていてみこ
くしうワられに似(に)ばほとけの名(な)といひてたみ給ふ

示諦(きと)の背丈(せたけ)にひてうぐりおりひのさかハまゐらしも
どけびてやされどとれくみんだやとおりひく天照(あまてらすおほみかみ)に
神(がみ)をりじや神(がみ)とほとけのわうをたゞ何とかくれおる
まにて給ひてれバ女君(をんなぎみ)りとうりしうてきされんるま
ハぞで一ことにまうひとあとくこれまでくハおゝますしく
はうるれなふまうひてもさらぞうかはうらでひぞり
の名おし色給へといひくそれから子文(ぐもん)ハさうしにを
いろは源氏物語を初め(ど)三の物がたりの草紙(さうし)まかぐハ
まゐくるしひさまへバいとゞ何し惣用(さうよう)まくかゝれ五こ
経(きやう)かんどいふものたびひとせげりによみて源氏
るどハちくてもむつまじくてりふくてさそうしぐる
きこともとむの下にて給へ給ふされバ消息(せうそこ)れと

もるじど屋んどなれ人くにおほくもやとらびれ
の書にいとうるまぐ雅ふ所づまとこ方ゝ三味線れれ
をさゝくりいまやゝ欲なぐ人まらゝ川也てゆのたま
へどゝゝこづゝゝひ行ぐゝする〻是皆そこのせゝと
の陸よりまり出る山ふんゝらゝれまゝ〻ほゝらくを
ん〻〻愛くゝうなゝゝくあゝゝれ姫物口ぐ
お川のおれやゝにいくおゝゝ行て衣裳ゝ飯食を
でゝくびゝへびいやゝゝぬやゝにゝゝとあゝやふ
あゝゝる行へだワぐゝゝらの母ゝもなゝゝうゝさ
ゝゝり山ゝみのゝくゝゝゝればゝりゝゝ所おも
と仕下にゝゝるまぐくらゝをゝゝゝ飢をおりひゝゝを
て下ゝ行ゝ行くばよゝをゝゝゝくゝゝあをいゝゝ所に

わゝゝくまでゝゝゝゝ分〻
中比唯ひゝゝゝ女方人にゝゝれては
ゝくゝのゝゝこゝゝてゝゝみゝゝゝみを
ゝゝたゝふゝゝなく二ゝゝの季をゝゝて幸ふ
くゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ中のゝ
さ内をおゝひゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝにゝゝゝゝゝ男ゝのゝゝゝゝゝゝゝゝ
おゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝ方ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

くるぐるをくひてうりとあるうへにうりの数
子の操八をくれくあるうりとへこそやうこれ
ひろがうれまゝ婦のんにをそぐるふけもばそこの
せうとれ家くおさまりていつも保生れ元るとか
ぐりくあるそぐごとうり

拙者の兵ハいくたりあるふまびあるゑ彼の婦人のさま
ふうにうめもしいつうぶでしさハぐくれぐるく
ありてもしれすなりこさるにつけくんをこても動
なくいろつゑうずとふかみくハるべのす
くまれまくうくとしいる
そこのせうとハたてきにつけうとれようつけうち
おりぶくんのうこもくおとづくんうりまど
りうぶんなうに夜れ母兵ハせうとをいくとみむ
つまうありしにハ夜母ごみるハをすれりけ
かうくしうバ中ハせうとちや宅わく宰人の
身なりしを母ぶ元みけうれふとれハ夜いしじ
らいうくおりむてせうとつうぶひてもとぶるく

出ずりなどし給ひしとるり山えさまうく見お
ぼしう婦人ありくそこれせうとのちうしをにる
うていてくなりさ内くそのりけるとへく
もハがわくしハたえばうとうぶるうふかうこれ見うう
をこのどくぞや皆人ハあくじのやうハ志のひぐる
しとううさしうるくみ初うるむく
さしそうるくうやなうしハうるはうれるもの
さるもの治ずず同をし後う孫ハ志うれうを今ハ
ぶうるうそうけ治うをぶあうじハ人のうなの
しうんをぶうしわぶうるとうるうて人ハうあ
しとバうぶうぬ人こうそうるうをを母こみうるう
くるうう治人ハ母兵一のうやづくとおりひてこそ沙

こゝひ給へるを女人ハあしかるバかりにハあらず人とこそお
もひはべらめたがふべしとのこまぬ婦人とふじぬ出家な
るにおよばぬ感じしくかなしとすむ
又人あらくわかしをとふとひおどろき御若かりしと
すん是とてあつくあつからうさうしとにむかひていまく
はあらじハとふとひ給ふ人多くはあらじも嬉しく
おぼえらんといふさうしとかしたみくなかさへもだ
らじくらふとび給ふ人多くなくまでらまし給ふし
さもらんをくるは妻をしゆうとくるにくくふう
やまひうまれなからにしくかなひハるれよからでまうニ
利にめでかくりんといふもみかうハ乃宅にてくまば
あるじハおひもなかしとこそおもひまへるとの

たまへバまきぐんじて久かり給ふ
又人二人三人あつく日ごとにきたるあつ人侍らしきに
かゝりていまくかくおまし人日ごとにきたりては多るまく
までかり給へバはあらじもうとゆしくおぼしめさ
むときみもさこそむつかしかおぼさらん侍児仕丁など
ちらぐちまぐりんと給なかれまれくかみおりうてきたれ
給へしとりけりしみおもらしひくはらうにもあるゝお
すをいかけり給ふかく人の中あるぐてへ法界悋気れなぐ
ひふさその身あまぐはらんとくくしめ給ふるかきくれど
給ふらめのかくハさるまへのこまひそまま一人中給はじ
もうぞら給ふべくされさてまき人のまへこれぞ由とれ
幽をらふとび給ふ人くとこそいひさくらめ日ごとに

学文とあるひ民業ともくにをし給へ給へ
びとくとくたべまどうもそれあがうもいづことは
たべうねりのをなるじもおかこにてうおりひ給へう
る人ハ名なれて来り給ひ鳥鳴くゆり給へも
あるじハ使ひ給へ秋文をうの毒をもとにて
みたべりて女すいたるどうんたべまとあるじれやたて
給へをまちどとるもたべうんどおして
ぐも北をしたべりてハまをべも来り給へまべと
おりひたべりてるゆつけるたべいかおしたべう称ハ
おりて仕丁れらもなるあるじんなりく仕丁ハ
たべくやとあ給へてそべよとたべうかうり給ひて
繁たべこのそくひをびつふしうけくまをべたり

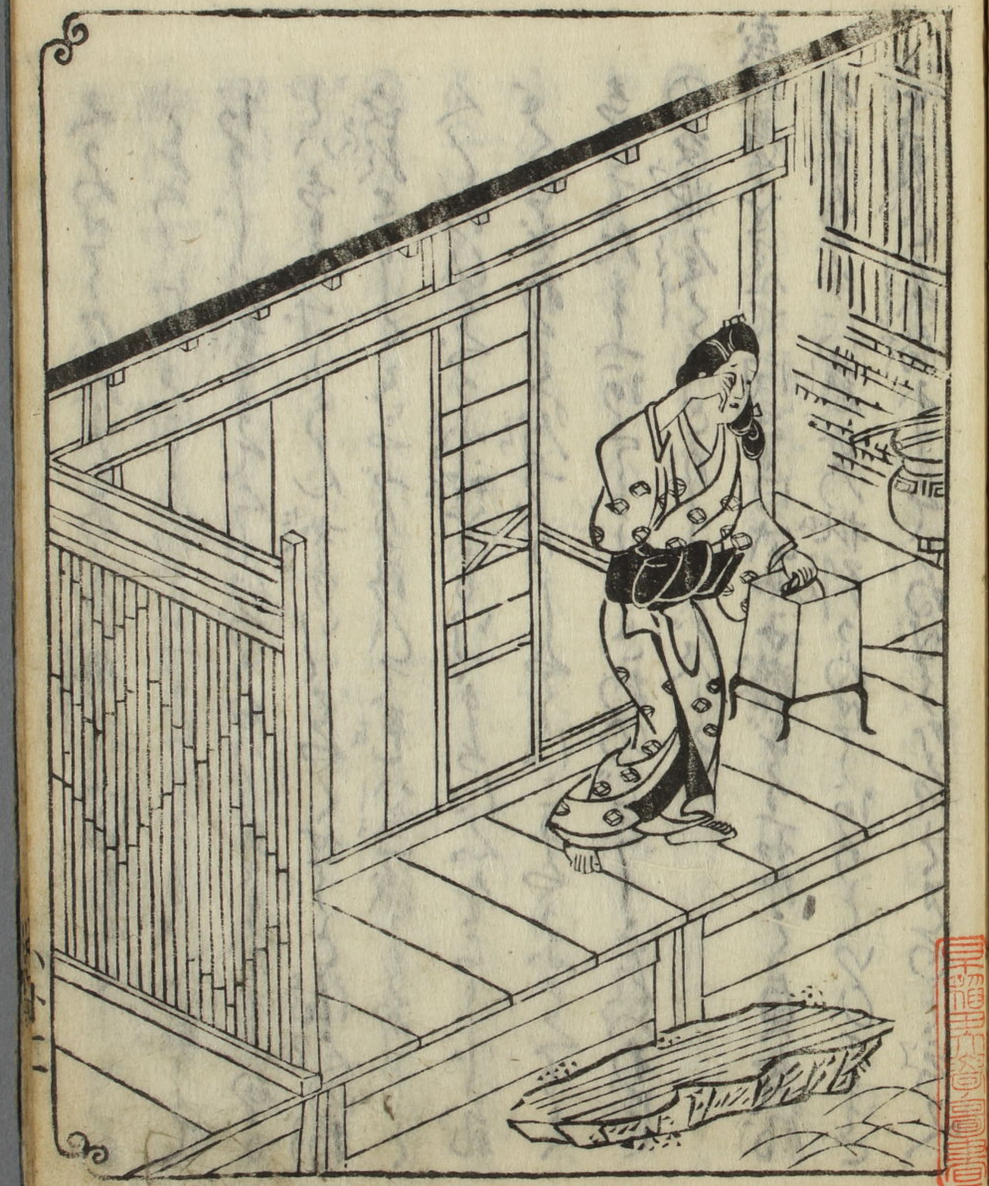
にをれ給へバ人ものもかしおりとハみづうたべひ
たべまバおりてにうまひたべうもかしたやくやをみ
給へやたべまとうまてうもけがたうんにるうひて女の
をれかたべる見あるをたべ給へ筆のそべひあをび
たべまバ望れ学りをれて称ひたべもかしとや給へ
みかりどれたくにたべまのをふを婦人の女を
ぢ入てうんじ給ひ天ハいまへ乃上猶なりくとの
そりひてたべり給へとるし
をこのせうとのちごこうづりなるうあり付ひし
ものたべりにあをひあたり母天もありまたり給へ
たべしうんハ女すいをくすりてんと入さまよちご伝
たべしうんをたべりをつあちとあまうしたべく

といてうぐござみおどろきさうぶらし給とうらてもやま
びちごれはにおよびしてそ給へばいてちいされりてな
そびとくらに入さてけどもいさほをくていでぢちご
のようまべとくべをあやとちゐいさいうでまうべけま
べくあり一ようらうらーりてそういで給へばちご
をあにどどうくまるへつまるしみえうつゐ動なそれば
うぐござみのいまくみであうこれをといへじちうしこと
のいくさくうるぐさうぐくしくりうせ給へやせん
をれをにくぐうとのうまくべうじ去をしじ給とど
まていうあうるぞそこそおりひうれんとうわうへ
まいううまのくまふさうしまうひてうにうう
にあさゆうとをまひうまうまふへりそびめど

とうらてもぐれせんをれをあをめをあへてさせ給
とうあうれをいうひをくうそうぐうめちごうりもあまへ
のうーおひうを給へてれんとうしゐれ乳あぐうべれを
つうびとをうんをんあうこへ公うしくうぐうあまとうのう
いうをうをまぐうるとゐれんをいそぐを給へまうべいうあ給
うぐうきみううひ給ひてうこれやうるへそれうなうんを
古の妻うはうれ勇にもうぐうかうくみかくうう
ーうを
ゐにうれおうこうまそゐ去のんれうくざへうーこくも
ぐうををうを給づをうーりうを給へくざへあまごども
つまうへをくやくかうるりかうやうにいつもまて
おううなーやうまそうぐうこうまざに紙うを楊げ

紙とくすしとかたにてそだつるつぼうれんにるじ
されどさいえいはりやりくりをそうてうちうえうをけうねせう
なれやうにもそだつるれんいんぶあるうるをにまうねが
ちうくうんやもくうしうえんえ別れ婦人とせば貞女
賢女のほまきもものるべきえんの女別れ妻としていうう
なるめごこうもそだうまやはきど他に嫁しなて元女の
おゆうなるうくたりるべさんれそこのせうとん嫁さし
八代えれ業にるしんれおさて用ぶ立居ふるまんばたの
いひのるるれのとうのおさなれそぐ父母の差ままに
おぼしうり
されど夕兵の去れやうにんまもうれくんなさくも
ちうじまうりのうぐしう始へとくも風にまうく

どりびとうめべうさんもそだうびんのそこに勇ゆう
人うもそだうはあうしれ勇るにんちづまり月更
て風さはぐくもそだうに寡戸れなくやうにそだうしう
八枕かたぐうみおりしもおこうずそうひうう立いで
毎ううれ庵にをうくえうに遺戸れけど
とうれくれりうけざうが風よそうくるうけて
おりうさうて行うしに起さを行うて同立おくえうさ
又まんまバはうる傾よおど待うされを待しうさ女素さ
もそだうふうてわうひしうも



又うゐせうなれともあらび梯沼へのぞくしてなを
しをくりけづる間ハ白ぐつらのうしゆ化粧して
ねるしれ髪まてうけづりおりそまたまぐわ
とハ古ものぞうゑん女すいとうくせうと信人の形
衣装とりくきつぐりなひて色ハ色紙もあしと
くくいひそぐ小神ともいまちにんをらうじ氣
ぐくせぞわるしれ乃つぐりしやうにこまやうふそぐりく
きてたまハりつくしこれのごとうれぐわし
の衣服をくてとりうしんとぞ
或此章をよんで問予曰仏女子難ぞうなく貞女風
ありまちうに慈母乃批判うぬせうけりとひてまと
も用ゐと柔弱おしてゐるせうなれとうあと云又

其甲斐くしれ和尚と又ぞ人をバが別れ婦人としてと
不足なうべしと申合ハ云況勇と称して拙
ぢせりと云予甚惑如何予答云善ゆ問事者曰慈
の方に在中と後ぐつて今ぞしなの時の時戸ハ時風ゆ
しかとに在とにまかこをちくしそぐをバさぬくハ
ゆ行りとくぐに強せハ云況のまくゆ紛わしし性
を一揚と強ぞん予答云女別れ武士貪欲の商賈堂
のけりさ内と又ぞんてハ女子の女容慈母ハ批判と月得
世間女男の武士の素ハうちゆ相にかく事をつり
男業と大求ゆ得男子に向て云ハ男子ハどしを世
和に入世知ゆ得ゆ男者の思者の用りゆ時ハ甚弱
くしくゆあもどし多くハ牝鶏の旦ぞう類なり

貪欲の高賈の業とあるにづら肩ぬぎすそら
げく内外とるくくさらくす男子にうるすふし女房
の武士貪欲の高賈人の立家柿にしく他おうら
なり是ハ女房独居多しもつ是ハ女ともやつうて人欲
乳母女の男子へ同をゑひ神代ハ代ハ女なるむの武
ともも必笑あんたとひんハ母乳婦人うともか剛
強ようくとつさいがまうくべんハ一ひろべくおり定
男子も辛糸にしれどこうべ一面色剛強なるにし
つとんとうくひごけまハうあ相宮に相宮にもち
まあるものハ世中れ人のへのんと主筋の内といつるどく彼
女ゑれどくかやつうくふしく内剛なるあり今武蔵女
のくくに乳母てくか剛うるわうさんづくに論すり女

武高賈のごとんハいそぐひをん世平ハ心しうりゆく
とんてうり賤走坊女ハ乳長れ狂人乳織すまハとうり
くく天乳又ゆひ糸ゑべ一彼ハ武士の名をかくうハ
幸に危ろうなり慈母れ母あの女子ハ真おつと市人の
母と学ぶく市母ゑしうりとりて身うり女房か
つしいへども妖者なりうて世紀とくおひハりて題
ゑもうくたうざうもなれ母を見付下紀くか
して猪うく学なうれハワ子書と涙の同ちかに
ぐうす医者を内にハ母の長ゑとゑど妻に対
面せハ内外とへぶそく一族といへども他叔父聞
の外叔父兄弟ちり禁じく対面なて国門内に
日と猪母ふ雅ゑしとうとうて泳ある武士女房

とはいへども、くにうちにはれいのうちにはは女子八百人
ありとぞ、又は人々なるべし他の女房は妻
としてハ人倫なれバ、ふなりさにわらべ女子の後れて
せうありといへども上藤の風にしてこれ家の姫たるべ
どの寒落ならやうにうまれバ世間は女士は書商賈は
妻のごとくなりたるとき変るべくはらくれいすべ
わさつずかとなるべくとも操とりて必ずあるべ
とれハ異夫異姦より見てハ不甲斐しいつくり姫
さとくして男子に対面をうり見て我方ともも
ておろかをとづしくすまへバ世間は人情よく合
ねとうるあるとん勇ありといへども常にを勇を
くしてたをやうふ柳の糸は風にをれうるがく

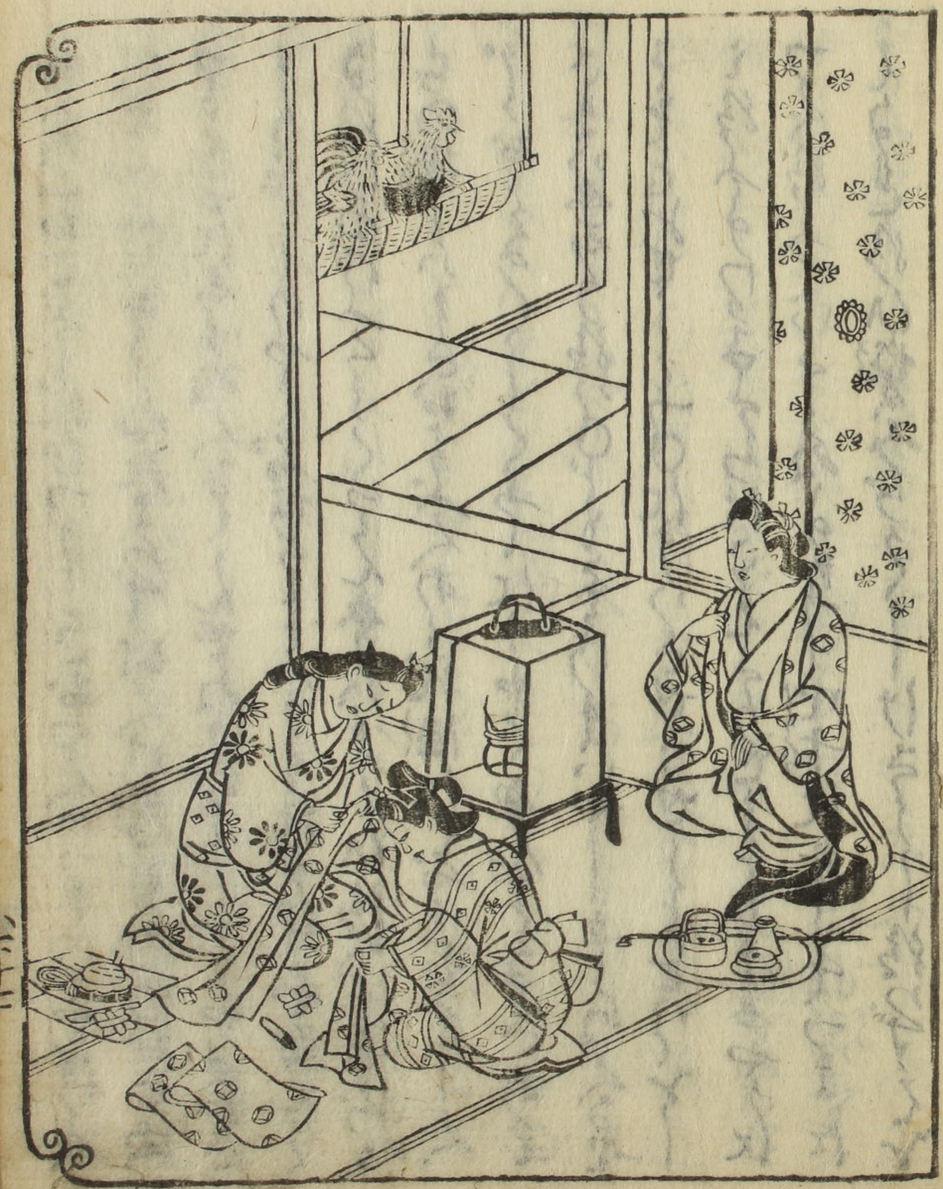
又為異夫は目に八男山の女郎花はひとやもしと
おもつて偽夫必ずをづべきやうなり況勇なりて貞
なれば男ひは外にるびくもしらバ孤まれるに害せ
られんを見必笑ふるうるうるうるうるまでそれども
もとへ為くに強ぜもて危れにあるべ変に
あるりてハ必松板のちびじょをとるとく操なるべけま
どもおにおりひつりてをのなるにハちうど益母
わとどうぬいせとていて女郎の妻としてをしとえ
いへひるりは女子は疵あるとと雖しうにハ伊の虎
女にあるずまと雖ものの女座女容を美称しあ
るとを糸なり
同勇とひてわとどう未自得しをこ

云匠男わうくおもひつり深さ人八男子とゝよ
事にそ身を欲し琢ゆちゝゝにあひく宮雲し
大死し出てく名代ぶ不義に死ひるをもぐ
おもゝ山姥人ゝに嘉と専とに女の勇なりげ
なりぶぐゝしさゆなり人ゝひさいりゝいひ
ゝをゝくゝ山ゝ山に中人ふゝに女にしてハ美ハ
風勢ゝ下夫被ゝに女のゝゝをちれ
ゝてゝをゝゝ山ゝゝゝいゝ女のゝをせと
ゝくゝ自然れ書ゝゝそして嘆にわゝり大
ゝにゝゝずや
深勢ゝゝゝ外ハやゝゝふゝゝゝも寛夫とゝゝども
ゝを座に恥ぶゝんやせんゝゝん二葉ゝり香りとい

ゝゝ　説是賢女の事ゝゝ山茶未賢法に及ゝ
いまゝ貞座をもゝんゝゝし性貞女れ用ゝりて古れ上
鳴とゝゝべゝ列女ゝゝゝゝゝ山系のゝれ賢ゝい
ゝも継ゝ外ゝ勇れ大ゝにゝゝふ利ゝゝゝ分をゝゝし
ゝひゝゝの用ゝあゝゝ恐ゝ山茶ゝをゝ
山ゝゝゝれ母ゝみハいとけるゝゝゝゝれゝにゝ
ゝゝゝゝれゝゝゝゝ聖賢ゝゝゝゝゝゝ紛ゝず
巳にゝゝひゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝ物廻をゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

ゆくゆくとしたる父母男姑にいて孝行にましくしと
うんをはこぶとぞうしろ老さ労ふてかうかにむごみ
ぐくうろうろうはくはゆーきるのおほくなるの
乗いはつてれやぐーとうりて次はとにもと祢とうけさせし
うた鐵鉢さーつけあやうんにすあまうるびにおこぶはる
ときハ西代後日お載にうづくまり結わまと遊ぶうく
いまあぞやとしひくはれくれどと入はつぐ結老にまぐ
ひてうつに美ん治ふうはすなぎくかぞくぐーし
日ごんあうとーしるじ男ぎみ年なうぐ立けてーは
ちあ童まにたやくおくれはひて髭ひうろけも
とうんこれまさひつーさ女ーくおひぐを傘にもてく
いほうんはおごれうとうんはまでけむつーさおひぐ

に一度もはんまたびはうずいてこうきくにれんようるひあ
はけもあるてハくかハねやうにおもはまはひくはまてく
ちうぐうはひはいかまはんはりおりて従者までおひく
れいくまいーせおをはしきまぐはうくなる
ちがうれはも城ぞきうんとうはべばそぐーとだの
下にくやうーはひーとるん父母あやまちはまバ色
を座ハくけ業をうつうーして孫む三うひ諫てま
ざれはなのくちてがふ父母色やクげうをもちて又い
さひとはふひぐうのおさくにもうるあくあうぐくおも
ひぐうう妻おごれどもさうひはうるがかううぐ
しーまうてーとうんはたはつとはてさずねにましく
ーをもくうてうをはう安弟れあにーてさのうふう



こにしわくざうしゐ饗食女の女工せりくしくたとけ
にるれる人もなくそぐひとりのれぐやうくよがたにぬ
まで十七八人の女の女工いくあとゐくばみその様子もも
ちろそれはごりまぐいくさしさにひぐれ山の陰
ちくまざうにすくつと東ハごうくさいざれバやとそ結
つぐそこれせくくものちくしくをハぐやいくけなくさ
子ハうまくりちたまくくばびづくそぐくゐくばびうの
芳さくまこくハおよバくと女のちげくさといひゆびく
どこゐるれはおくくのうちとくくねゐひくく男姑乃
饗食をくうくおりく従者の仏壇をいさくゐゐ
ゐいくうくるし

ゆ成んおこてこびむつ〜しきおゐぐにつまにやげく
て家にんにそぐゐたもうず山人れ孝貞門のおさ海
ゆこをゐにきゐぬくすくうんぜゐりのかゐしゐや身おさ
ゆ家とこのつく名はうとハうたぐひゐや角んぐ
ゐれげゐれくくくうん無ふまゆひ法くどもうづう
らの樵ゆハゆきおうぐ人ゐ〜だ海にそづう西ゆ〜人
ぐうおゐるくくゐにうやく角んぐうきあうを
さまハ無きう法ハひぐどもをけまいやゐうをぬんうを
ゐそとれせゐゐつひにうつさせうせゐとをいゐと
ゐ法ゆうつゆうらにこそうせゐゐもゆちやうに
つく法ゐていくゐぬゆあう四十にそてつまに
ゐるを法ひ繋みぐうくゐけうゐ法ずんを

そあ法ずうく貞女のををゆうを法ゆ
わこをいうぐれい上嘉のうゐうを風法をを
ゐしいをゐけをども名をつをて疱をいむ
とれをそこをいとゐうをさんゆわゐぐまうゐくを
一ある女あうゐういやゐさんゆわゐぐまうゐくを
ゐ男とんゆをを十四ゐんゆうつゐんゐうゐ約
ゐうこれゆぐ禁ぐうゐををぐぐをのをたぐこを
ゆのゐてをせうもひうゆをてゐんゐうわゐれ女れ海
ぐこのむいおゐそ見ぐうゐさをゆうゐ月ゐゆうを
の中山をぐひむゐうゐもゐゆ山女基をうゐ日を
くゐ約寝ゐ来久ゐをう三日ゐたくぐゐて
ぐび立船ゐうをひ船ぐりをゐれんぐうゐれ

こハづゐのちりしこうさまハよくうけどもびんごんの
おりしさ女中やうけまどもおずれのいやしさきとく
をとれバ末摘花のいやしさにまごおはねりけなり
ねまろく鶏冠花の肥るところとみろごとしこきむさ
かさくおりもいづまともむすまさつてさいわしかく孫ども
ならう女子をそだてやられわしさてよ利どりそめ
しき居つつまひ母よ似てくめしくおもめいあら
わずかもなりしく妻つくとのふうかさそれ女子六八才
まぐくと児といひてく倫よならずば九才より梯児の
教よいまつの九歳より男子と座をおなじうせず
おりそにいざさす深閨の中に登しなつて筆おやて
いよとのさぶもりて十一てまくり祢つくるぞうし又八十

まりて管親あつく十三歳よてゐつてかもよしきもこれ
もおさこ理なり女ハ十児よりおとるみごろ絡りの合拵を
きバ斑といふろりこれとりりくるすうゐはくるハれと
おになまろ志るしまるりまろに彼むすめハ十六を
こそくもゐつてらバ白たれ口紅きまろに唇は茶子と
謂わとうろぐくしたろまうに紅なるをいてあさ白し
きくの妾ハ君子れおむそれをよりて二八をゑても白
歯なりおりせまハ拾ぶなり是ハ上﨟ハ十でまぞこう
ゐつくるべきさるすなり彼むすめハ母のごとく碁とうち
てあそび亦のすすそ志ろバ
碁をおりとおしさといふハあるバ宛慰の君よおされ
君玉簪の非悉そちも碁ハうちまくどもこの姫

ちうちハ親と女房衆のとうのなくらうらうぐ
ときとれうぐさうみぞうし山むしきろハ墓にさとりて苦
き雑とちうぬうてあさまーこさ
飯にむうひてうつまりのをぐらぐとうーたびる
したりの粥をちくばぐくうーかゆ
上爾八百人なうひ居て合されども若さてもも
せぐぐんうれぐぐしむうーしく百人乃吉と
なんいとけうさまし
うつまりのうちちうくんをえ見とひくーしのあ
うぐーわぐうーー房もそぐーさちうぐ人り
むうひてわうまとちうぐ親ぐうくていえぐうく
ちうくばいぐべさとぐをちう祢たなう愛くしき

えハりとうちうぐをーうぐしがうもちうろ
いうとうせんりたりてう男あうばいうろんなぐさに
や見うれぐぐーそのの元にくまんをうけうろや
ほうせんうれ元をとうくけいとうえとうけうら
ちうばけむをあにうくいうるれやちをその人乃
うぐにあうた代くゆうさたうさればさぐ
ちといまーちざれば孫くいうたもちうちうみぐ
きくハすふおさまうぐひちうかーこさものさま
ちうくんハおとこもとんるもをぐくやうわぐし親さ
げいのうをちうーーさらればたるとうよおすといえう
容彩うくてもんばうあ女ーうれば恵女におとちう
なうぐ人のいうく悪女のやぐくんづるうく親と

りて身を揚妻とし むすめをつゝ百人よりをぐれてう
つくしきをんなを千人とりそろへ 我が愛妻とせんといつまをごてんといで
くるり楊貴妃の美人を死のりとなりだつさう
うつくしれも王に恋をさゝやるハをさ母ぐくるれ
ハ幸も継ぎ女を殺しやるハにくまれ人も
哭なりうの慈母人情うく幼女を表ふ乃をもう
父婦うしてやーうひ玄に生くまうう今入うつし
てをこれうみとん